



いずみ野

令和3年5月31日

校長 齋藤 敦子

<https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/izumino/>

学校教育目標 「自分が好き 友だちが好き 学校が好き このまちが好き」
～心豊かに学び合い、ともによりよく生きようとする子～

やる気・根気 ～心に火が点いたなら～

副校長 中村 好宏

ある日のことです。

学級みんなが次の活動のため移動し始めているのに、自分の席から動こうとしない子がいました。こういうときに私は「質問を二つ（あるいは三つ）するよ。」と言って、その子に聞きます。

「一つ、今、何の時間ですか。」

「〇〇。」

「二つ目、で、あなたはそれをやらないの。」

「・・・」

そして、「ふ～ん。」と一度感心・共感した言葉を出します。

「三つ目、それで、どうしたいんですか。」

と聞いてみることもあります。

一人ひとり何かしらの思いをもって、何かをやってしまったたり、逆にしなくなったりします。

このときは、その子はそれなりの訳を私に言いながら、「やる気が出ない。」と言ってくれました。

学校でやる気が出ないならば、やる気を起こさせるのが教師の務め。その子のやる気スイッチはどこにあるのだろうと考えながら、二人で階段を下りました。質問を二つしかしていませんが、その子はいろんなことを話してくれました。私はただ、「へ～、そうなんだ。」「なるほど～」などと言いながら聞いていました。そしてその後、担任の先生にこの顛末を伝えました。

最後にしっかりと温かく面倒をみるのはやはり担任の先生です。（私がいいところ取りをしてはいけません。）

やる気の火を点けるのは私たち教師の役目ですが、点いた火を燃やし続けるのは本人の根気次第です。しかし、燃え続けることはなかなか難しいです。そこで、再度、ときには再々度、火が消えないように扇いだり、新たな薪を足してあげたりすることが必要になります。

子どもの頃にはまったアニメでは、瞳が燃えていました。そして、天上の星を見上げて努力すればあの星のような輝きを得られることに夢中になりました。女の子たちも苦しくても悲しくてもコートの中では平気なの、と涙を見せながら頑張ることに共感していました。「臥薪嘗胆」ひたすら努力・根性で長い時間燃え続けながらゴールを目指すことが当時当たり前に思っていました。

それがいつしか授業場面を例にとりますと15分のヤマを3回、スモールステップでできた喜びを味わいながらやる気を継続させる工夫を実践することが当たり前のようになってきました。

答えをすぐに求めたがる現代の風潮ではありますが、なぜ、どうして、訳は、と根拠を明らかにすることで自分の思いや願いが明白になり、やる気（意欲の喚起）や根気（意欲の継続）が培われていきます。

昨年度、活動の意欲を高めるため、振り返りをしっかり行いました。なぜお米を作るのか、どうして野菜を育てるのか、皆でその訳を学び深めました。結果、次への意欲が自然と生まれました。

今年度も子どもたちの思いや願いを掘り下げながら、持続可能な取組を重ねていきたいと思っています。